



特集：国境（くにざかい）フォーラム in 隠岐 —シンポジウム—



隠岐の島町五箇生涯学習センター（2012年9月10日）

* * *

日本島嶼学会隠岐大会・グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」共催

2012年9月10日 10:10～12:00 シンポジウム「国境フォーラム in 隠岐」

進行役 岩下明裕（北海道大）

パネリスト 全京秀（ソウル大）

安溪遊地（山口県立大）＋安溪貴子（山口大）

松田和久（隠岐の島町長）

* 報告にかかわる写真などは主にパネリストの皆さんから提供をうけた。



「国境フォーラム in 隠岐」によせて

2011年9月の奄美・徳之島に次ぐ「国境（くにざかい）フォーラム」第2弾が、島根県隠岐の島町五箇で、日本島嶼学会との共催で開かれた。奄美が終わって、次の開催地が隠岐と聞いたとき、境界研究を志す研究者として何らかのコミットメントをすべきだとは考えた。だが、竹島問題を冷静に議論できる韓国人研究者は皆無に近い。さすがに韓国の研究者と隠岐で踏み込んだ議論をするのは無理だろうと思っていた。

そのような折、ソウルで開かれた韓国沖繩学会で人類学を専門とする全京秀（チョン・ギョンス）教授と知り合い、懇親会の際に全教授の鬱陵島への想い、そしてこの海域を日韓で自由に往来できるような仕組みをつくりたいとの熱意のこもった話をうかがい衝撃を受けた。さらに、この学会に私を招待してくれた安溪遊地（あんけい・ゆうじ）山口県立大学教授が日本島嶼学会にゆかりの深い宮本常一先生を敬愛していたことも、私を揺り動かした。この2人が隠岐のフォーラムのパネリストになってくれるのであれば、実りある議論の場が創れると確信した。

それでもこのフォーラムを実際にやるかどうか私は躊躇していた。その私を強く後押ししたのが、長嶋俊介事務局長を始めとする日本島嶼学会の方々であった。とくに長嶋先生は、現地パネリストの調整、竹島がその一部であった旧五箇村での会場の手配、さらには町民の方々への広報などを一手に引き受けてこのフォーラムを推進してくださった。これらのご支援と隠岐の島町の皆さまの熱心な参加がなければ、このように中身のある議論は生まれなかった。ここに記して心よりお礼申し上げたい。

なお開催直前、韓国大統領の突然の竹島訪問により、日韓関係は厳しい状況に置かれることになった。だが予定していたパネリストの全員が出席し、フォーラムは無事終了した。念のため付け加えておけば、このフォーラムはそのような政治的騒擾を受けて急遽、開催されたものではない。中央の動静に左右されず、日常の視座から現地で考える。これがこのフォーラムの基線である。このような時期にもかかわらず、機微に関わる諸問題を地元できちんと議論できたことは、フォーラムの最大の成果といえよう。本報告書を通じて、竹島問題に直面する地元の本当の声や気持ちが一人でも多くの方が理解いただければ、主催者として、また本報告書の編者の一人として幸いである。

（岩下明裕）

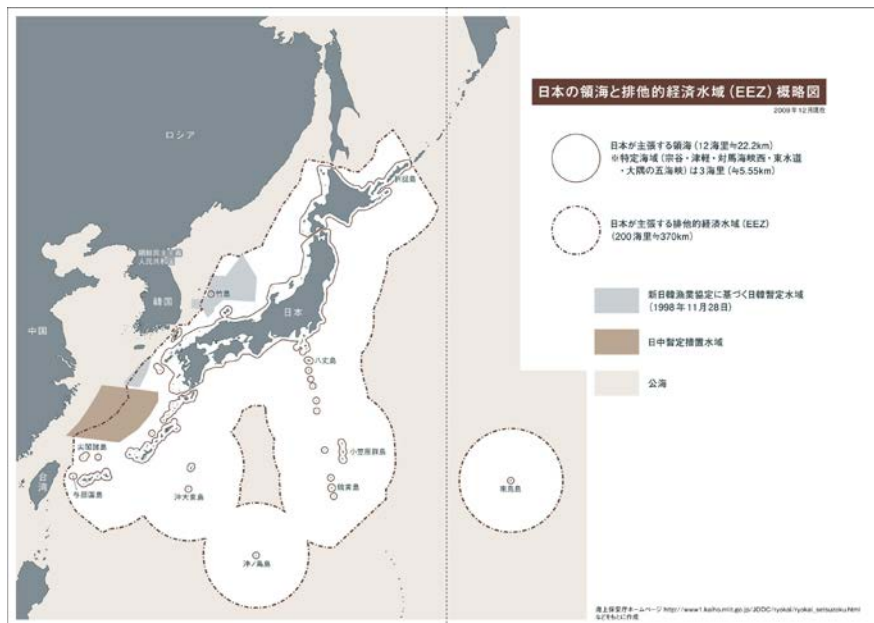
（長嶋俊介）ただ今から「国境フォーラム in 隠岐」のシンポジウムに移りたいと思います。ここからの司会は北海道大学スラブ研究センターの岩下明裕先生をお願いします。

（岩下明裕）北海道大学グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」を代表してここにいます。今回、この隠岐の島にて国境フォーラムを日本島嶼学会と主催する運びになりました。私たちのプログラムは、欧米を中心に活動する世界の境界研究ネットワークをみながら、日本を始めアジアやユーラシアにはそれが存在しないことを鑑み、ぜひ研究・教育のネットワークをつくるということで始まったものです。



とはいえ、日本のプログラムですから、アジアやユーラシアのなかでも日本のことをどうするかを常々考えています。皆さん、ご承知の通り、周りが海ですから、日本の国境や境界の問題を考えようとすると、必ずどこかで島のことをやらなければなりません。もちろん、私たちは、例えば稚内、福岡など、いわゆる国境地域と呼べるような地方とも一緒に活動しておりますが、島の大事さとはいうのはあまりにも自明ですので、島嶼学会の皆さんと一緒にこういう国境フォーラムを重ねてまいりました。

海上保安庁がつくった地図を多少アレンジしたものがこれですが、現在の日本がいうところの国境、境界です。国境＝領海という表現はまだしも、排他的経済水域を国境とはいえないので、これを境界と表現しています。この地図は、北方領土、竹島が入っていますが、実際にはロシアあるいは韓国に支配されています。だから、根室を国境地域と言うと政府に怒られます。根室は国境ではない。国境は択捉の先だと言われることがあります。しかし、根室には事実上そこから先に行けない境界、国境に準ずるようなラインに面しています。にもかかわらず、自らを国境の街と呼べない苦悩があります。境界と表現はこういうケースでも使いやすく、広い意味でボーダーを考えようというのが私たちの立場です。



この地図は対馬、竹島から尖閣、北方領土の部分ですが、皆さんにここで一つ喚起しておきたいことがあります。実は日本のこの海の境界が実際にはほとんどが決まっていないという現実です。ここに北方領土があり、ここに竹島があり、このあたりが決まっていないのはすでにご理解いただけと思いますが、それだけでなくここもあそこも決まっていません。日本のこのユーラシア大陸側で境界がはっきり決まっているところは、対馬の周囲しかありません。ここだけは大陸棚も含め決まっている場所です。日本側が主張している海域は確かにこの地図ですが、相手と境界がきちんと合意されている場所はほとんどないということをおまづ知っておく必要があると思います。

他方で、こういった国レベルの話も大事ですが、私がこのグローバルCOEのプロジェクトの中で、日本に関して、特に島嶼学会と一緒にやってきた経緯ですが、現地の視線を大事にしたいということです。国境フォーラムは、5年前の与那国を皮切りに小笠原、根室、対馬と続き、この対馬までが島嶼学会と緊密に連携してきたものです。根室のフォーラムでは中俣均先生にお話いただいたこともありますし、与那国町長、対馬市長らと首長サミットもやりました。



対馬でやったときは、日本人だけで内向きの議論にはいけない、隣人の韓国の専門家や、世界で境界問題を考えている研究者に欧州と北米から参画していただき、一緒に議論をしました。これが私たちのスタンスです。それと並行して、学者だけではなくて実務者、特に自治体関係者と一緒にやるという試みを続けてきました。この写真は対馬でやったときのものですが、本格的な実務者レベルの会議がここで始まりました。



これらの企画を積み上げてきてよくわかったことは、多くの日本人は境界地域のことを知らない、例えば、ここ隠岐にいる人たちが竹島のことを実際にどう考えているのか、あるいは根室の人たちが本当のところ北方領土問題にどんな思いをもっているのか、石垣や与那国の人々が尖閣問題をどうみているのかなどなど、ほとんど地元の普通の声が中央のメディアや中央の議論には届いていないということです。私たちのプロジェクトは、できる限り現地のことを世の中にプロデュースしていくことを目的としており、今日も映像制作会社や新聞社の方をお呼びしているのは、そういう発信を支援したいと考えているからです。

今日の会議の様子は紙にも落としますし、映像も作ります。これを後ほど皆さんにお届けします。映像でいえば、最初に作ったものが「知られざる北の国境：樺太と千島」のDVDでした。これはその後、シリーズ化し、対馬、八重山・台湾と回を重ね、最近、小笠原ものもプロデュースしました。作ったものは必ず現地に持って帰って、現地の方々に見ていただこうとしており、これはDVD「知られざる国境の島・対馬」を、韓国まで50キロしかない上対馬で上映会をしたときのポスターです。

このネットワークはまさに先ほど申し上げた対馬フォーラム以降、自立し、略称JIBSN (Japan International Border Studies Network)、境界地域研究ネットワークJAPANとして昨年、生まれ変わりました。実務と研究の連携を積み上げた蓄積をもとに、国境離島と境界地域が抱える共通した、あるいは異なる諸問題を、互いのアイデアやプランを交換しながら、かつ排他的にならずに外国の方も交えて、ネットワークとして機能させていこうという試みです。最近、私が書きました「国境離島の相克」(『都市問題』8月号)の抜刷を受付で配布していただきましたが、ここでもJIBSNの意義をまとめて



います。今日ここでこういうお話をするのも、隠岐の方々にも JIBSN のメンバーになっていただければと考えてのことです。

JIBSN は与那国から台湾との交流のためにチャーターで飛行機を飛ばしたり、今年は稚内で会議の後、フェリーにのってサハリンに行きました。

そういう次第で、国境フォーラムそのものは JIBSN としてすでに自立したネットワークとしても機能しているため、島嶼学会の方では新機軸として国境(くにざかい)フォーラムを始めてくださいました。去年は、「内なるくにざかい」ということで、奄美は徳之島でセッションをやりました。那覇のジャーナリストと鹿児島政治学者、それに現地をよく知る歴史研究者による鼎談のかたちで議論は盛り上がりました。そして今回は隠岐で開催されるということで、やはりここでは竹島について考える場をつくるべきだろうとこういう集いをつくった次第です。

今日は皆さんの生の声をきき、その目線で議論ができればと思い、そのような話題を提供して下さる素晴らしいパネリストをお呼びしました。最初の報告者は全京秀先生。ソウル大学で人類学を教えておられる先生ですが、とにかくすごい人です。日韓関係がどう荒波にまみえようが、先生は絶対に隠岐に来られるという確信を持って、今日を迎えることができました。先生にぜひ拍手をお願いします(拍手)。

2人目のパネリストは、山口県立大学の安溪遊地先生(拍手)。離島振興法や国境離島の話は島嶼学会につきものですが、この離島振興法と切っても切れないのが宮本常一先生です。その宮本先生から直接、薫陶を受けたこともある安溪先生に、もし宮本常一だったら、竹島、隠岐、国境離島の問題をどう考えられるだろうかという目線で、今日はしゃべっていただこうと思っております。

最後に、やはり地元の意見をお聞かせいただきたいということで、松田和久隠岐の島町長です(拍手)。会場では記録は取りますが、言いたいことを何でも言っていただくというのが私たちのモットーなので、メディアの方々いるからといって全然気になさらないでいただければと思います。私たちがやるこの手のセッションは、基本的にすべてオープンでパブリックなイベントとして組織しています。パブリックですから、言いたいことをががが言いあうというスタイルが求められます。そして関係者のご発言はすべて個人としてのものです。ですから町長も今日は町長としての発言もおありでしょうけど、個人として発言いただきたいと思っております。会場のみなさまも同様に、ぜひ個人として本当に心のなかで考えておられることを言っていただければ助かります。ぜひ、これが本当の隠岐の考えだということを、私たちに中央や他の地域に発信させていただければと考えます。

では3人の先生方に20分ずつご報告いただき、その後議論したいと思います。では全京秀先生、どうぞよろしくをお願いします(拍手)。

(全京秀) 皆さん、おはようございます。韓国のソウル大学からまいりました。自分の専門分野は文化人類学なので、その面からウルルン島と隠岐の島について報告したいと思います。皆さんが今、持っているレジュメは、僕が韓国語で作ったテキストの縮約です。つまり、日本人向けに作ったものではなく、今年3月に韓国で発表したものを縮約して作ったレジュメだということをまずはご理解ください。

僕は韓国の島を学生時代からあちこち回りました。ウルルン島は、こっちでは鬱陵島(うつりょうとう)と言います。ウルルン島には2002年に初めて家内と一緒に行きました。結婚記念日だから1週間そこまで旅行しようかと。そこで行く前に少し調べてみたら、ウルルン島についての確かな論文が非常に



少ない。これはちょっとおかしい。話はほとんどが独島、つまり竹島に関する話ばかりでした。僕が単純に考えたのは、これはちょっとよくない。なぜなら、今、韓国政府の立場で言ったら、独島は韓国のものですが、行政的にはこれはウルルン島の一部ということですから。

それなら竹島問題もウルルン島から見るのが先じゃないのかと考え、中央政府からの視線ではなく、文化人類学の目を持ってウルルン島について書きました。ウルルン島は、皆さん、ご存じのように、黒潮に乗って南方の漁民たちが船で訪れたところです。それは日本の対馬も同じです。この海を、政治の目じゃなくて日常生活の目を持って、つまりウルルン島の人々、ウルルン島でずっと暮らした人々の生活の面から見たいということで、少し整理して紹介します。

この写真はちょうど1年半ぐらい前に隠岐の島の北の端の久見に行ったときのものですが、八幡昭三さんを訪ねて、竹島に関する説明を、先代からの話も含めて聞きました。僕が日常生活というフレームワークでウルルン島、この海を見たという意味は、例えばウルルン島の人々は自分たちが今まで暮らしたその場所、その場所の名前をどう使ったのか、そこから始めたということです。土俗地名、エスノトポニミー (ethnotoponymy) と英語では言います。

この写真は朝鮮半島、最近エキスポをやった麗水(ヨス)市の南にある巨文(コムン)島の写真で、19世紀イギリスの海軍が撮ったものです。巨文島の漁民たちが毎年5月、船に乗ってウルルン島まで来ていました。これは黒潮の恵みだと思うのですが、島に上がってアワビ、サザエ、ワカメを採り、島の木を切って新しい船を造ります。そして古い船は捨て、新しい船で秋が来る前に巨文島の方に帰っていく。これが毎年の巨文島の人たちの生活でした。

巨文島は韓国の地図を見たら、西側の全羅道の方ですから、全羅道方言を使います。東は慶尚道方言です。ところが、半島のずっと東にあるウルルン島の地名を調べたら、ほとんどが西の全羅道の言葉でした。例えば、海にも港にもすべて全羅道の言葉がある。そこから、独島/竹島のあちこちの小さい岩も全羅道の言葉で地名が付いたのです。その地名を研究した結果が、全羅道の漁民、漁村から出た巨文島の漁民たちがウルルン島から独島/竹島まで入って漁業をやったことが分かりました。

もちろん、隠岐の島からも同じことだと思います。日本からは隠岐の島だけではなく、石見の浜田からもウルルン島まで、独島/竹島だけではなくウルルン島まで入って、村の一部で生活した事実もあります。要するに、この海はウルルン島の人々と隠岐の島の人々が、一緒に自分たちの生活のため漁業をやった海だったのだと僕は信じています。

ではこの漁民たちは何を採り、何を食べたのか。一つはアシカ、一つはカメノテです。カメノテの写真ですが、下に大西さんの地図がある。大西さんが作った独島/竹島の地図です。大西俊輝さんは『日本海と竹島』(東洋出版)という本を出した有名なお医者さんですね。

ちゃんと見たら、東側と西側、二つの島で分かれていて。一番左側は「菩薩岩」と書いてあるんですね。これは大西さんの本に載っている地図なんです。菩薩岩を韓国語で発音すると、ポチャルアンとなるんですが、ウルルン島の人々は、僕の方に教えたこの岩の場所の名前は「ポチャルパウ」だったんです。だから僕はこれが大西さんが作った地図じゃないかと思うんです。でも大西さんがウルルン島からこの名前をポチャルパウだと聞いて、ポチャルは日本語の菩薩だから、菩薩岩ということを書いたんじゃないかと思うのです。これは、本人に直接聞いて確かめたいんですけども。

ところが、全羅道の方言でカメノテのことをポチャルと言うんですね。それが大西さんの耳に伝わったときには、方言だとは気付かないで、これが菩薩になって伝わったんじゃないかと思うのです。カメ



ノテは韓国の海岸部ではよく食べますよ、写真の一番下のみそ汁に作ったものは、去年この隠岐の島で、久見の近くの食堂で食べたみそ汁の残りの一部。最初はカメノテが入っているとは気付かなかったんです。ずっとそのみそ汁を食べて、最後に残されたものが、あ、これはポチャル、カメノテでした。そう、今もカメノテを食べているんですね。

カメノテというのは実は英語の翻訳です。もともと日本語ではないのです。「turtle's hands」という英語なので、それを翻訳してカメノテとっている。だから隠岐の島も昔のものについて、言葉、方言があるんじゃないかと思うんですけれど。あっちこっち聞くんですけれど、みんな、「あ、これ、カメノテ」とおっしゃる。もっと調べたらこっちの言葉があると思います。安溪遊地さんに聞いたら、山口県の萩の前にある見島、あそこでは、カメノテや巻き貝、笠貝の入ったお汁を方言で「グベ汁」というんだそうです。ひょっとすると「グベ」はカメノテのことかもしれませんね。だからその場でずっと住んでいた人々が、自分たちが生活したその場所について、その場所の認識がその地名に残されて結局地名になったと思ったら、ちゃんときちんと場所の地名の研究をしたら、一部、全部じゃなくても、一部はその昔の生活を勉強できるんじゃないか。それがひとつ。

もうひとつは、アシカのことです。ウルルン島から、僕は2回独島／竹島に上がったことがあります。西島の南側に雨水のわき水があります。小さなポンプみたいなものがありました。『大阪朝日新聞』を見たら、1934年の記事を発見しました。朝日の記者と久見の人々が一緒に向こうに行き、1週間そこを取材した記事が大阪朝日新聞に残っていました。ここは子どもを育てる場所、アシカたちが子どもを育てる場所で、そこにわき水があるんです。

漁民さんたちもそこから水を採っていました。次の写真は橋岡忠重さんとか、こっちの海からの人々が向こうに行き漁業をするときのもので、彼らもわき水をそこから採ったと思います。次の写真、左側はトドなんです。右側がアシカ。トドはもっともっと大きい。雄の方は少なくとも600キロ以上です。でもアシカはちょっと小さい。人間よりちょっと大きい。オットセイより大きいぐらいです。

これがアシカです。これはインターネットから取った写真です。僕は今まで生きているアシカを見たことがないのです。IUCN（国際自然保護連合）の報告によると、1974年に北海道礼文町のトド島という岩でアシカの子ども1匹が捕まり、殺されて剥製にされた事件がある。しかし、礼文町役場に電話をしたら、役場の人は興味がないし、何も分からないのです。剥製も今どこにあるか分からないのです。

トドは、カムチャッカ半島の東側のコマンドルスキー島というところにロシア政府が保護センターをつくっており、トドが観察できます。最近、電話してそのなかにアシカはいなかと訊いてみました。アシカはジャパニーズ・シー・ライオン（Japanese sea lion）、トドはステラーズ・シー・ライオン（Steller's sea lion）です。見たらすぐに分かると思いますが、彼らは見ることもなく「アシカは1匹もいない、全然いない」と言っていました。僕の希望はこの千島列島のどこかにまだアシカが生き残っているのではないかということです。

というのも、1974年に礼文島で子どもが生まれたということは、親も兄弟もいると思うのです。希望がすぐなくなるのは寂しいです。今年1月済州島にトドが1匹上がったのですが、誰かが殺して、国が今その研究しているようです。

アシカに戻れば、だいたい日露戦争時代かその前からずっとアシカ狩りがあったのです。朝鮮王朝からも人がウルルン島に時々、派遣されて、2、3匹ぐらいの皮を持って戻ったようです。そういう記事が『朝鮮王朝実録』の中にあります。



左：トド



右：アシカ

20世紀に入ってから、この隠岐の島、浜田の漁民も競ってアシカ狩りをしたと思います。日露戦争が始まる頃から、年に1,000匹以上殺されました。10年でだいたい1万5,000匹が殺され、それがアシカ絶滅につながったのではないかと思います。

20世紀初頭の日露戦争、そしてその後は本当に近代化の時代で、より良い機械を作った。船や銃で全部アシカが絶滅されたわけです。これは1934年に独島／竹島で捕られたアシカの標本です。今、大阪の天王寺動物園の書庫の中に剥製があります。子どもが3匹と大人が2匹、全部保管されています。これがこの海に人間が入った生活の結果でした。

僕はこのアシカの住まう場所はこの韓国の南の方、この東海／日本海の方、これらだけじゃなくて中国側と韓国の半島のその間も海がありますよね、黄海と言うんですけど。その黄海でも昔はあったと思います。山東半島の詳しい地図を探したら、山東半島の南の方に、中国名では海驴島（ハイルーダオ）という地名があり、これはアシカ島という意味なんです。あそこにはもともとはアシカがいたと僕は信じています。

この東アジアのこの海で昔からずっと、人間より以前からずっと住んでいたアシカが今絶滅させられた。この状況は、これからこの海で生活する人々がこれからどうすればいいかのヒントだと思います。だから、ウルルン島や隠岐の島の人たちが、竹島とか独島とか、このどちらかの言葉を使ったらすぐに国境・領土問題だ、というような政治的な言葉ではなくて、日常生活の言葉に戻って見直した方がいいじゃないか。それがこの問題を見るフレームレファレンスになるかと思っています。ジオポリティクスじゃなくて、さっきジオパークを説明されるときに言葉が出たんですけども、コモンズポリティクス。人間だけでなくこっちに住んでいた動物、例えば代表的なものはアシカ、人間も含めてこの地域をどう守るか、これからは季候変動とか高い波が来るんです。そこにちゃんとポイントとして根を下ろして、将来を目指していくのが、もっといい知恵じゃないかと思うんです。

いまジオパークを説明されたときに、「最初はジオパークの区域の中に竹島も入れる予定でした」と、うかがいました。結局、入れないことにしたのは知恵だと思います。あの場所をジオパークに入れたら、日韓で全然平行線になると思います。すぐに真っ向から対立する政治問題になったでしょう。

だから隠岐の島の人々の生活、ウルルン島の人々の生活、そこからちゃんと考えて、これからこの海



の環境とか未来をどうすればいいんですかということをご提案したいと思います。じゃあ、これで終わります。どうもありがとうございました（拍手）。

***注）** 生物屋として、ひとこと補足します。全先生のおっしゃるとおり、カメノテはやはり新しい言い方のようです。カメノテの隠岐での方言を尋ねてみましたら、島後の場合、五箇地区では「アサリ」、都万地区では「シオサレ」、西郷地区では「シラサリ」というそうです。萩の見島では、カメノテのことを「タカノツメ」と呼んでいます。ちなみに、島後では、笠貝を「ブベ」とか、「ボンベ」とか言っています。見島のグベ汁の「グベ」も、本来は、ヨメガカサ（方言では「ヨメノサラ」）などの小型の笠貝のことをおもに指し、よい出汁が出るように、カメノテやフジツボや巻き貝なども加えるということのようです。隠岐の「ブベ」と見島の「グベ」のように、「ベ」で終わるよく似た発音なども、海つながりの島々に共通の方言語彙として興味つきません。（安溪貴子）

（岩下） 全京秀先生、ありがとうございました。では続きまして、安溪遊地さんの方から、どうでしょう、宮本常一先生が訪れた国境（くにざかい）について、よろしくお願いします。

（安溪遊地） はい、安溪です。宮本先生がお元気だったら今どんなふうと言われるだろうとかということを考えてみました。一番悩ましいのは、地域研究と地域への愛情、よく冷えた頭と熱いハートをどうバランスさせるかということで、どっちかが足りないと寂しい研究になったり、熱すぎて研究じゃなくなったりしかねないというので、いつもそのバランスの取り方に苦慮するところがございます。

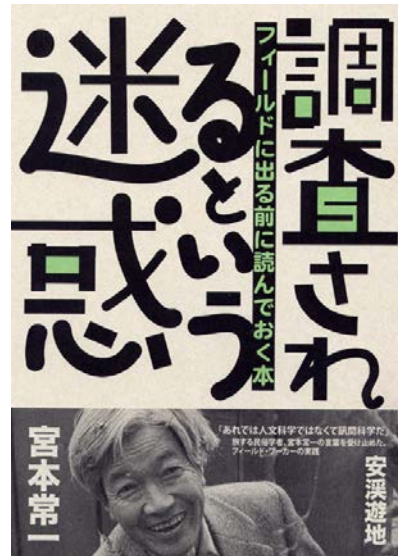
今日のお話は三つで、1番目は「調査されるという迷惑」ということから、「島の仲間」といわれるところへどうやったら行けるかということ。2番目は中世にさかのぼる記憶または記録というのは、国境（くにざかい）にこそ残っていると宮本先生は書いておられます。本当にそうかなということ。3番目は国境の向こう側から日本をもう一度見直してみるとどう見えるかということ、時間があつたらちょっとアフリカの人の発言も引用してみたいなと思います。

「調査地被害——される側の様々な迷惑」という文章を、宮本先生は1972年に書かれました。私は1973年に幸い読むことができましたが、それにはこうあります。1番、他人に迷惑を掛けない。2番、出しやばらない。呼ばれもしないのに私のようにすぐ笛を吹いたりしてはいかん。3番、他人の喜びを心から喜び合えること。実に何でもないようだが、やるとなると大変難しい。『調査されるという迷惑』は2008年に、宮本先生との共著の形で周防大島のみずのわ出版から出ささせていただいた本です。その調査地被害の最後のところで、宮本先生はこう書いていますね。「調査というものは地元のためにはならないで、かえって中央の力を少しずつ強めていく作用をしている場合が多く、しかも地元の人のよさを利用して略奪する者が意外なほど多い。」これが結論です。

自分でもこの研究費はどこから出たのかとか、もともと私は自然人類学から文化人類学に移った人間ですから、ナチスへの協力や植民地支配の歴史など、いずれにしても重い問い掛けです。「そうだね、そのようにしましよう」というきれい事だけではとても済まされない。要するに、問いかける刃（やいば）は自分に突き付けられてくる。宮本先生にさっきの三つの教えをくれたのは渋谷敬三さんです。渋谷さんは「わが食客は日本一」という文章を亡くなる2年前に『文藝春秋』に書いて、52歳であった宮本さんを就職させるために紹介しました。そして百姓であつて、ミカンを一つ食べるだけで、あ、この畑は



どの成分が不足しておるといふようなことを見抜けると、そういう素質と経験を持っている。断じて、ただの学者じゃないぞといふふうを書いておられます。



さて、私、宮本先生に初めてお会いしたのが1974年でした。京都大学の大学院の1年生になっていました。私が大学院に行きたいと思ったのは、移動大学というものに接したからです。そこで今日の共同発表者の貴子とも出会いましたが、こんな感じで2週間勉強する。そしてこの後、大山のふもとで開かれた移動大学に私は遊びに行きました。1人分のキャンプ用具を入れたリュックを背負って、みんなが混み合って大きなテントを張って過ごしている下の方の広場の端っこにテントを張っていたんですね。

ふと気が付くと、ゴマ塩頭のがっしりしたおじさんが、見知らぬおじさんでしたが、スコップを持ってきていて、ググググッ！ って、私のテントのまわりに幅30センチぐらいの溝を掘りながら、こんなことを言いました。「テント生活で一番大事なものは水はけだ。縄文時代の人にはね、やっぱり君みたいにこういう舌状台地の端っこに家を造ったもんだよ。グググッ！ そしてそこからごみをどんどん斜面の下に投げ捨てた。だから住居の遺跡とその遺物の集積場所が違うところから出るんだよ」、などというマニアックな話をしながら、テントの溝を掘ってくださったんです。その後、「おい、リュックはもっと丁寧に入れんと、テントがゆがむがな」と言いながら、私のカメラとかテープレコーダーとかを見て、「おお、こんな小さい軽い装備を見たら、またわしも歩いてみとうなってきたなあ」と言われたので、そうか、これは講師宮本常一と案内に書いてあった宮本先生だと、私もやっと気が付きました。

それで、その時フィールドとしていた西表島関連で探していた文献について、誰が書いたか分からない『八重山嶋巡検統計誌』、いまは3冊しかみつからないけれど、残りの何十冊かが見つかるといいんですけどねと尋ねたら、「それは、田代安定が時の山県有朋内閣に提出した報告書が、『琉球共産集落之研究』を書いた田村浩さんの手で収集されて渋沢先生の所蔵になったものでしょう、残りもじっくり時間をかけて探してごらん」といふふうにすぐ言われまして、文献についても大変に広い知識をお持ちだということも分かりました。それから私は聞いてもいないのに、地元がよくなるには地元からのアイデアでないといけない。そのためには、通産省のお金よりも自治省の方が、予算は小さいけれど、地元の意見は通りやすいよなどと、私が聞いても分からないようなことまで教えてくださいました。

実際にはフィールドで調べたこと、聞いたことを地元の人に事前に見てもらって、「うん、いいよ、間



違ってないよ」と言われてから発表するようにすれば、調査地被害の大きな事故はたいがい防げるわけです。それを前提として、実際に見ること、聞くこと、そしてたとえば農業であればやってみることが、宮本先生の特に秀でていたところだと思います。この写真は並んで立って窓の外を見ているイヌと子どもです。人間がイヌになることも、イヌが人間になることもおきない。お互いに乗り越えられない壁は最後まであるだろうけど、同じ時を共有し、同じことをやってみることはできるはず。下手でも太鼓を打ってみると言われてお祭りに参加するなどというのは、ごく初歩的なところですけれど。



写真の女子学生はうちのゼミ生で、ソウルの食肉市場のフィールドワークをした後、ニワトリをさばくというのを山口の農家で実際にやらせてもらって、やっぱりそれによってその命をいただいているということへの感謝などを如実に感じる事ができたという、そういうふうに言っています。

そして、これは宮崎県の綾町をこんにちのように有名な場所にした郷田実さんという元町長さんのお話を聞いて、私は非常に印象に残ったのをご紹介します。彼は南方の戦線に送られました。彼の部隊は、3人に1人は戦死、3人に1人は戦病死、3人に1人は自殺した部隊でした。「郷田君、死のう」と何度誘われたか分からなかったけれども、自分には、石にかじりついてでも生きて帰ってはたしたい、故郷への夢があったというんです。それは、もう一度でいいからあの緑なす山を見たい、あの清らかな水を飲みたい、そして祭りばやしを聞きたい……。そう思って帰ってきたら、山と水はあったけれども祭りばやしが消えていた。「夜逃げの町」と言われた綾を、祭りばやしが再びひびく活気ある町、誰しも行ってみたいと思うところにするまでに、時代に先駆けた有機農業を中心として血のにじむような20年間の苦労があったというお話をされました。そして「誰も知らないところには誰も来ん」と言われました。私たちはそういう課題とどうかかわっていくかということをやいま問われているんだと思います。

これは原子力発電所に、山口県の上関町というところに計画されている原子力発電所に反対している祝島の漁民たちを応援するという意味もこめて、日本生態学会などで自然保護の学術的な取り組みとしてやっている会場に、宮本先生の奥さんのアサ子さんが来てくださった時の写真です。これはアサ子さんからいただいた、掲載許可というか、宮本先生のさっきのテントの話ですね、それを発表していいですという承諾のはがきなんですけれど、そこに「上関原発反対!! 絶対に反対!!!」という言葉が書き付けられていました。これは、瀬戸内海を愛した宮本先生がご存命なら、かならずはっきりとおっしゃることであろうと私は思っています。

そして、これは我が家の田植えです。学生たち、こういうことが好きな学生たちが集まって来ます。そして2011年3月11日の震災の後、いままでの自給だけではなくて息子の名義で6反という田をつくる



販売をめざす農家になりかけています。今は収穫をひかえて、ここに旅に来ている暇は本当はないのですが.....。



さて、2番目です。国境に古い記憶ありという話で、宮本先生はこう書いておられますね。対馬というところには古いもの、古いことがいっぱいある。鎌倉時代以来続けて作っている田んぼがあったりする。対馬は国境の島である。海の向こうに朝鮮が見える。しかも島民自身の手で守らなければ救援は普通すぐにはやってこない。そういう緊張感が古いことを残したのではないかと書いておられるわけです。これは、日本中をくまなく歩き回って見た彼の直感ですね。

それで対馬に行ってみました。周防大島の人たちが移住した浅藻（あざも）というところが、赤米の神事で有名な豆酏（つつ）のそばにあります。宮本先生の名著『忘れられた日本人』（岩波文庫）のなかで「やはり人間が一番偉いものようでございます」という、印象的な言葉を残した浅藻の人たち。厳原に行ってみたら韓国の観光客があふれていて、売り場も半分ハングルで書いてある。浅藻にも行ってみました。浅藻の開港記念碑が小学校の跡に建っていました。22年ぶりでしたが、豆酏神社の宮司さんにお会いしたら、よく覚えていてくださっていてお話が弾みました。

これは、「国境フォーラム」での山口県立大学生の発表です。対馬の高校生にアンケートをとって見たら、心理的な距離は山口や東京よりはるかに釜山やソウルの方が近いという、当たり前と言え当たり前なんですけど、そんな結果がはっきり出ました。そして対馬の北に行ったとき、たまたま晴れていて海の向こうが大変よく見えました。釜山のビルまで見えましたので、おう、このぐらい見えるんだったらそれは近いなと思いました。

国境に古い記憶の残存ありという宮本先生の仮説を何とか立証できないかということで、話がどんどん飛びますが、与那国島をたずねてみましょう。宮本先生もよく引用しておられる『朝鮮王朝実録』の済州島民漂流記というのが1479年の5月と6月の項目に出てまいります。漂流後2年半滞在したということです。与那国島には半年いた。そのことを、島の人には覚えているものでしょうか。五百何十年前のことですから、私は訊ねることも思いうかばなかったんです。ところが、2007年3月に済州島に行ってみたら、そこには何も証拠がなかった。でも、帰国の翌日から与那国島の知り合いが不思議な話があるといって電話をしてきて、3人の漂流民についての伝承を届けてくれるようになりました。2年半かかって聞きましたが、非常に豊かな伝承が実はあった。それは、40年にわたって封印されていたのでした。そしてその中に与那国島と台湾との交流との古い伝承も出てきた。



与那国島から台湾は、110キロしか離れていないのに、あまりにも共通する文化的な要素が少ないように語られている。でも実際にはもう見えるときには水平線いっぱい大きく見えるし、10日ほど前に台湾の蘇澳（スアオ）鎮に行ってきましたが、与那国島も山の上からはよく見える日があるそうです。

この漂流民は与那国に半年、西表島にも5カ月いて、いろいろ回って無事に帰ったということが分かっているのですが、1479年の聞き書きと1962年ごろからこんにちに至る聞き取りで、みんなほとんど二重丸ぐらいに一致度が高いんです。不一致の「×」になっているのは、口頭伝承ではブタにびっくりしたというふうに伝承されていますけど、『朝鮮王朝実録』にはブタはいないと書いてある。その点ぐらいで、ほとんどが、9割以上合う。それだけではなくて、その人たちが地面に書いた、今日の食べ物とか、何か月たったとか、そういうメッセージまで伝承されていて、そこに「ぐにぐに」と、何か書いて一所懸命説明するけど、ついに島の人には分からなかったというんです。これはおそらく字ですね、漢字だったと思います。

そしていろいろな人間的交流があったし、ミカンの花が咲き乱れるところに来てわっと泣きだしたので、みんながもらい泣きをして、またホームシックが出たね、きっとミカンのあるところの人たちかねと言ったという話や、慰めるための歌も残っています。それで、済州島出身の全京秀先生にお願いして、先祖がお世話になった与那国島の海山里のカミガミにお礼の儀式をしていただき、亡くなった人たちの慰霊のチェサも西表島から遙拝で行いました。このことを報告したら、たった一人残った伝承者はようやく長い長い間の肩の荷が下りたとおっしゃっていました（『奄美沖縄環境史資料集成』南方新社）。

伝承の中にネコを飼った話があります。ネコを飼った目的は、そのネコで騒いだらあの漂流者たちの身に何か起こったのではないかと分かる。ある晩異変が起こったので見に行ってみたら、怪しい男たちが潜んでいました。捕まえて話を聞いたら、台湾から物々交換に来た人たちが、こともあろうに大事なお客様である漂流者たちを殺して、その持ち物や食べ物を奪おうとしていたのだということが分かりました。島の人たちは、すごく怒って、鎌が欲しけりゃやる、食べ物もいくらでもくれてやる。でもこの大事な客を殺すなんていうことを思わずに、どうぞ帰ってくださいと言って追い返したと。二度と来るなどは言ったけど、傷つけたりはしなかったと言っています。

このようにして、この当時台湾との物々交換が非常に日常的だったということが分かります。その舞台はおもに海の上だったんです。具体的には島からはアワとか塩とか、そういうものを交換した。与那国の塩はおいしいというので人気があったそうです。1500年という歴史の節目に、石垣島と宮古島・首里連合軍の間で戦争が起こります。そして首里の尚真王に滅ぼされたオヤケアカハチという英雄がいました。そのニュースを与那国に伝えてくれたのは台湾の人たちだったんだそうです。大変なことになっている。石垣の人たちはもはや自由に楽しく暮らすのではなくて、王様の命令で非常に苦しい生活をしている。食べるものにも事欠くありさまで、お前たちのところにもきっと来るから準備しておけと言われて、準備をした。

歴史によると1522年に来たわけですが、その間の22年間の準備は何だったかというのと、まず家族を二つに分けて全員殺されても半分は生き残るようにしろとか、大事なものを隠しておけとか、それから病気のふりをするとか、年寄りはまだ寝たきりになっておくとか、子どもに言わないとか、ちゃんと薬を準備してうそでないということを見せるとか、そういうのをやったそうです。これは竹富島で人頭税時代の拷問を受けている私です。こういう感じの者が来るぞというので対策を練ったわけですね。

その後も与那国島の東側の岬に見張り所をおいて、船がくると警報を発するために早馬で村に知らせ



が走る。「ンニドー！ 船が来たぞー」。一番警戒するのは石垣島の船です。税を取りに来るからです。あわててぜいたく品、米と酒がたくさんあるのをすぐ船に乗せて隠す。島の中に隠すんじゃなくて台湾との共通の漁場まで持っていくんです。台湾の人がそれを見つけて助けにきてくれたそうです。それで役人が帰ったと知らせが来るまで、10日でも海の上で二つの船をつないで飲めや歌えの交流会、お祭りのようなことをしたんだそうです。1893年（明治26年）、笹森儀助という探検家が行ったとき、与那国島は人頭税が2年間不払いになっていました（『南島探験』平凡社）。でも実際には余剰はあった。それを隠していたんだと思われます。

それだけではなくて、稲作の研究をすると、お米1束の大きさが、名前はほぼ同じなのに、ずいぶん違うんですよ、西表島では稲30束をマルシ、それから与那国島でも稲30束をマルティといって、もともとと同じ言葉だと思うんですが、実は与那国島のは束が2倍大きかったんです。そして30束から5升の米がとれた。それが西表では3升しかとれなかった（『西表島の農耕文化』法政大学出版社）。これは、当時、収量を束で数えたことの盲点をついたのだと思います。要するに石垣島や首里王府に対して実際の収量を少なく見せる節税対策だった。そういうふうにならぬ中央からの苛斂誅求に対して、自分たちの知恵で国境の向こうの人たちと力を合わせて対策を練ってきたんだということが、この辺境に生きる人たちの知恵であるということを知ることができました。

人間的な交流はいまも続いています。この写真は、与那国島から日本の6人の若者が泳いで台湾の蘇澳にわたり、東北大震災への200億円もの救援をありがとうということを言いに行った、そういう歓迎の様子です。

ケニア出身で、私のスワヒリ語の先生である、ムアンギさんと周防大島を旅して、ここも大変なんだよ、過疎とか高齢化とかいろいろある、と言ったら、「何を言うてんねん。誰も飢え死にしてへんやん」と関西弁で言われてぎゃふんとなったことがあります。それから20年。アフリカは大変です。例えば1994年、ルワンダで内戦が起こって、わずか3カ月で100万人もの人が虐殺される。私は隣のコンゴ民主共和国に通っていますが、コンゴの人たちは、わあ、ルワンダじゃ人間がアリみたいに死んでいる、ばかな連中だと言っていたら、その内戦が自分たちのところにまでやってきて、そして今ではもう500万人という人が内戦の犠牲者になっています。

そのように隣の国が内戦にでもなったら、こっちも大変なことになるし、世界から見捨てられた状態の中で、もう恐るべき虐殺が起こりうる。それが世界の標準的な常識であって、生ぬるいことを言っているんじゃないよ、日本人！ というのがアフリカ人の言葉です。宮本先生は、晩年はじめての外国として東アフリカに行っています。そこで、とつても深い親しみを覚えたし、言葉が分かったらどんなに肩をたたき合って仲良くなれただろう、日本人にとって身近な世界であり、いろいろなことを反省させてもくれるとおっしゃっています。彼は1975年に初めて国境を越えて、本当に家族のように迎えられて、いい旅だった。その後1980年に亡くなるまでに何度も外国に行っておられます。こういう感じで国境を越えておられます。

そういう宮本先生の思いを今もう一度受け継ぎたい。これは私たちの課題です。大切なのは、戦争さえなければ、こんなに豊かに幸せに暮らせるんだという、そういうメッセージではないかと思います。ですから、いたずらに愛国心をあおったり、隣国と敵対するようなことを言ったりして、内戦や戦争につながるような愚かな道に国民を引きずり込もうとする政治家だけは、どの国でも選んではならない、そういうことではないかと思います（拍手）。



(岩下) ありがとうございます。知られざる国境（くにざかい）をお互いに知ろうということですが、最初の全先生の報告のときに、韓国の中では竹島、独島は言うけどもウルルン島の話はしないというのが印象に残りました。ふと私が思ったのは、私たちは北方領土の話はするのだけど、北千島の話はしない。樺太の話もあまりしない。国家に切り取られた一部はステレオタイプのように繰り返されるのだけど、そこから抜け落ちたものを知るの容易ではない。しかし、実は消された部分が本質的には重要で、そこからいろいろな見えるものがあり、きこえる現場の声があると思います。

今の安溪先生の話ですと、特に与那国と台湾の話で、一つには国に知られたくないこと、要は自ら知られざるようにしている側面もあるのだと気がつきました。そこには地元の知恵みたいなものがあるのでしょうか。この話、実は今でも続いていまして、先ほど日本の境界は対馬以外決まってないと言いましたが、台湾と日本の間にも境界がないのです。あそこは伝統的水域と呼ばれており、200カイリを引いた地図をみるとわからないのですが、実際に互いにあうんの呼吸のようなかたちで自由に漁がなされているとのこと。これはかつての台湾との八重山の付き合いみたいなことから続いているのかなと、今話を聞いて思った次第です。

ではお待たせしました、松田町長、よろしくお願ひします。ぜひ、知られざる国境、隠岐の話を、今日は我々に聞かせていただければと思います。どうぞ拍手でお迎えください（拍手）。

(松田和久) あらためまして、松田でございます。今日は、町長という立場でなくて、いま大きな話題になっている竹島問題について個人として、一島民の立場でお話させてください。今からの話は、決して町長という立場からのものではないという点をご了解ください。

全先生からもお話がございましたが、私は竹島海域は隠岐、島根半島、鳥取も含めた多くの方々が利用してきた歴史が事実としてあると思います。鬱陵島を始めとする韓国の方々もまたその海域を使ってきたのも紛れもない事実だと思っています。竹島の領有権問題を突き詰めれば、厳しい戦争でしか解決し得ない、従って結論を言えば、これは決してあってはならないと考えます。

平成11年に日韓漁業新協定が締結をされたとき、竹島は現代国際法に照らし合わせれば、日本の領土だということになったのだと思います。竹島を未解決の係争地として棚上げする代わりに、周辺を暫定水域として日韓の共同漁場として、ここを有効な海として利用し合ひしようというのが、あの協定だったと、私は水産庁から聞きまして、そのように思っていました。

2月22日は島根県が制定した「竹島：県民の日」です。今年は22日がちょうど離島振興協議会の正副会長会議がありましたので、竹島集会には出ておりません。従って、官房長官をはじめ国の関係機関に、その前日2月21日に挨拶をしてまわりました。

実は昨年2月22日には、県選出国會議員の自民党代議士が「今年は自民党が13名の議員団を連れて松江に乗り込むから」とお話がありました。でも私にとっては少し違和感がありました。

というのも、平成16年10月に隠岐の島・島後の合併があり、それまで竹島領土権確立隠岐期成同盟会の会長は、久見を所管する五箇村長でしたが、平成16年秋からは私が引き継いでおります。会長となって初めての要望活動は平成17年1月です。そのとき、20カ所以上、挨拶回りをしました。しかし、どこからも何の返事もありませんでした。前村長にいまの隠岐の島町の教育長をお願いしたので、国に要望して国から回答があったかどうか尋ねました。教育長は、「どこからも何もありませんでした。」と、こ



うおっしゃっている。

これだけ厳しい財政状況の中、我々は遊びに東京に行っているのではない。少なくとも国に対策本部ぐらいはあってもいいのではないかと、こう思いました。当時、自民党政権時代、各関係大臣や関係省庁にお願いにあがりました。しかし、外務省の齋木さんも含めてみな腰が引けていると思えてなりません。北朝鮮の拉致問題を解決するために韓国を刺激するわけにはいかない、竹島対策本部なんてこれは大変だということがわかりました。どこの省庁に行ってもありありと見えてきます。しかも理由をはっきり言いません。

内閣府に北方対策本部はできています。領土問題について、竹島であれ、尖閣諸島であれ、南鳥島、沖ノ鳥島であれ、国境島嶼をまとめて所管をする省庁の一つぐらいあってもいいはずだと思うのですが、これがない。竹島を明示できないなら、せめて、北方領土と一緒に領土対策本部として内閣府で一括して所管するというのはいかがですかと代案を持ってお願いしました。しかし、まったく何の対応がありません。



細田博之先生が自民党官房長官時代、私は2回、要望活動に参りましたが、残念ながら、あいまいなままです。今さら野党になって、「松田、13人で来たよ」と言われても、私はあまり嬉しくありません。対照的に民主党は今、総理大臣も玄葉光一郎外相も、ようやく主権国家の代表にふさわしい言葉で竹島について物を言っています。「不法占拠」と。これに対して自民党の先生方は批判されている。批判しない方がいい、と私は思うのです。

ところで、この竹島問題ですが、私は決着の方向性はすでに出ていると思います。問題は、竹島周辺を暫定水域、これがいいか悪いかは別として、それを有効な海として互いに共同利用し合いたいという協定が結ばれているにもかかわらず、日本の漁船が入って操業できないということが一番のポイントです。ですから、もう一度、平成11年に立ち返り、両国が友好親善を図り、共同漁場として利用できる海域にここを変えることが先決だと考えます。

竹島領有権をお互い主張し合っていけばいい、だが解決するまで協定は互いが認め合っていくべきで



す。昨年、私は竹島に関する会議のとき、これまで「見て見ぬ半世紀」と申しました。すると自民党のある先生が、最後のあいさつだった私を廊下で待ち構え、「見て見ぬふりはしてません」と言われたが、冗談ではないです。政治は結果責任です。長い自民党政権時代に、なぜ竹島周辺、例えば接続水域に海上自衛隊の巡視船を置く、海上保安庁の監視を置くことさえしなかったのでしょうか。

全先生には申し訳ないですが、現代国際法上は、竹島は日本の領土となっています。しかし、互いが主張しあいつつも半世紀ほど見て見ぬふりをしてきた結果、もちろん私も行ったことはありませんが、四十数名が一举に泊まれるような宿泊施設が韓国政府によって整備され、船の接岸施設が建設され、ヘリポート基地ができています。こういったことをやめて、この海をどう友好的に管理するか、互いが考えていくしか、私は方法がないと思います。

韓国のやり方は一方的です。これは非常に残念なことです。昨今、日本は国際司法裁判所に提訴して、その場できっちりやりましようと言っています。平和的解決はこれしかない。だが、これに応じていただけない。残念な思いです。私も含めてここにおいで隠岐の関係者、水産関係の方々、みな日本の立場を「見て見ぬふりの半世紀」と受けとめています。

この隠岐や島根県、そして慶尚北道が、もっと友好親善を図り、互いが理解し合って、この海を、台湾と与那国島のように共有できる海として立派に使っていかうではないか、これが人間が人間である故の行為ではないか、私が申し上げたいのはこれだけです。決して戦争とかを考えているわけではありません。互いが協調し合えるそういう環境をこれから私は隠岐も島根県もつくっていくべきとの主張であるとぜひご理解ください。ありがとうございました（拍手）。

（岩下） ありがとうございます。私は、韓国の人、いや世界の色々な場所に呼ばれて領土問題を議論する機会が多いのですが、町長のおっしゃることを本当にその通りだと感じながら聞いていました。韓国の人たちは1998年の新漁業協定や暫定水域の話をもっとくしませんね。私は、韓国のあなたたちがその協定を守らずに日本の船を一方的に追い出すから、日本側が怒ってここまで事態が来たのだといつも言うようにしています。本当に大事な部分だと思います。

思えば、2005年に竹島問題が沸騰したとき、私が理解する限り、まさしく地元の人たちはこの部分が許せなかった。そこに中央から様々なナショナルにもっていく話がかぶってきて、政治問題が国家やナショナリズムの機微にかかわり、互いに引くに引けなくなっていくと考えています。お手元に北海道新聞の私へのインタビューがあると思います。そういう話になったら触れようと考えて用意したのですが、町長がおっしゃったとおり、竹島問題の「見て見ぬふり」、これには単に政府が弱腰であったという以上の理由があると思います。

実際、尖閣、北方領土も加え、この三つを比較しながら日本外交をみると、竹島問題とは皆さんご存知の通り1952年の李承晩ラインから始まりますが、要するに米国と韓国の同盟があり、米国と日本の同盟があつて、他方で日本と韓国の関係が微妙だというときになにがおこるかということです。対北朝鮮のみならず、対ソ連、対中国の文脈で、日韓関係が崩れる、あるいはおかしくなるというのは、米国にとってはどうしても避けねばならないことでしょう。日韓基本条約を結ぶとき、はっきり確実な証拠があるわけではないですが、いくつかの議論の中で互いの理解があつたといわれています。まず韓国が支配していること、現状に日本は抗議はするけどそこを触らないこと。韓国側もこれを受けて、それ以上のこと、つまり実効支配の強化をしないというような約束があつたと、私は考えています。



ところが韓国は、その後、建造物を造り、いろいろなものをつくり、そのたびごとに日本は抗議しますが、それ以上に踏み込めないというのは、やはり日米同盟という枠組がどこかでこの問題をかなり規定していたと思います。日本は海に囲まれていますから、ユーラシア大陸のどこかで陸戦をやっている国境に比べれば、平和です。また当時は200カイリの排他的経済水域などなく、領海も12カイリでなく3カイリでしたわけですから、それほど切実ではない状況だったとも思います。いずれにせよ、この問題は日米同盟の従属変数として扱われてきたと私は考えています。

尖閣も実は似た状況で、ソ連をターゲットにして日中和解を70年代にやるとき、この問題を棚上げし、互いに触らないようにした。日本が支配を続ける一方で、中国は抗議する。他方で、日本はそれ以上、先を出さないと。日本政府はある意味でまじめなのでしょう。そのまま何もせずずっと置いてきて、昨今、もうちょっとやればという声が出て、例えば船だまりを作ろうとか、そういう話になり、中国がこれは了解が違うんじゃないかと反発している。程度は違いますが、竹島と逆の構造があると思います。

ただ最近、日米同盟の方が中国を気にしているから、むしろ尖閣を利用してどんどん中国を日本が押し込んでいくという政治的な判断も日米同盟の中では私はあるのではないかと思います。でも、やはり竹島は、いろいろな意味で日米韓の関係の中では静かにしておきたい、激しくなってはいけないという判断があるのだらうと思います。

北方領土に関して言うと、昔、ソ連は敵でしたから、これをターゲットにしてがんがん運動をやれということだったと思います。ただソ連が崩壊してロシアになり、もう敵はないという状況で往生しているかんじですね。互いに何とかしようという努力はしているのですが。米国も日露関係がよくなってもかまわないと考えているはずですが、日本もロシアもこれまでの経緯があり、互いに降りられないのだととらえています。

では残り30分ほどで、フロアを交えて議論しましょう。フロアからの質問も受けます。

(会場から) 五箇のものです。最近、竹島が大きく問題になっていますが、ぜひ韓国の先生に、先ほど町長がおっしゃったことをどう思うか、聞かせてください。

(全) 町長の僕の話は出発点が少し違うと思うんです。町長の出発点は政治的な観点があると思います。町長は戦争にならないようにということを前提に、暫定水域を指示されています。僕はこれには詳しくないです。

他方で、韓国が独島にいろいろな施設を造る。日本の政治家がああ島について何か言うたびに、一般の民衆たちがばつと感情的になり、どんどん悪循環に陥り雰囲気が悪くなる。これを受けて、政府が国民感情を守ろうと何かを造る、この循環だと思います。

僕が理解するのは、この独島／竹島問題について韓国では過去の日本の植民地支配がすぐに連想されるということです。日本はまだその昔の植民地支配の意思があるのではないかと。自分たちにとってのクエスチョンがある。これは韓国の問題ですが、植民地時代の被害者の認識です。過去から考える。被害者の反対側は加害者、加害者はすぐ忘れることができる。だが被害者はその立場を全く忘れない。次の世代にも伝えます。

独島／竹島問題を議論するとき、国際政治的な観点からこの問題を議論しようとする、韓国の一般国民は必ず昔の歴史問題をとりあげます。政治的な枠組でこの問題を考えるとき、歴史問題も含めて論



議するのがいいのではと思うのですが。

(岩下) 全先生のおっしゃる通り、韓国にとってこれは歴史問題です。先週、韓国の東北アジア歴史財団、まさしく竹島問題の歴史的に研究するところの研究者が北大に来て議論しました。本当に韓国の方は、何でもかんでもすべての議論を竹島にもっていきます。我々は北方領土や尖閣の話をしているのに、だから竹島では、とかと。竹島ではこうだという枠組みですべてを解釈するのですね。それをやめろと言うのですが。竹島の向こうに、率直いえば竹島の議論をしながら竹島問題の中身がなく、竹島のことを言うのだけど、実際には従軍慰安婦問題であり、いろいろな過去の日本の話になる。竹島問題が従軍慰安婦問題で、そして天皇に謝罪を求める、このつながりがまったく理解できない。

私は韓国の人と話すときは、竹島問題を領土問題として議論しない限りは解決できないですねと言います。彼らにとっては、領土問題ではないのです。領土問題としてこれを合理的に考えようとするのは、海の権益を持っているウルルン島の人であり、ソウルとか要するに現場から離れた人たちの言説はまったく別の次元の話をしているのです。これは、日本もまったく同じです、外野は外野のくせに当事者の顔をして勝手なことを言うわけです。このフォーラムの趣旨の一つは、そうではない話をしたいということす。

(会場から) 五箇におります。まずソウル大学の先生の最初のお話のところが非常に興味深かったのですが、結果的には町長がお話しされた暫定水域につながっていくと思います。要は互いの住民が生活の場として竹島なり、我々の言う鬱陵島なりにおられたわけですから、そういう知恵を使っていわゆる暫定水域をつくられたと思うんですが、なぜこれが政治的な駆け引きだけに使われるのかと思うと、ちょっと残念です。昔は互いの生活が成り立つために、使い合って、仲良くしていたわけですから。そこにもう一度戻ろうというのが、この暫定水域の精神だったのではないのでしょうか。暫定水域の協定の中身を、もしどなたかご存じだったら教えていただきたいと思います。

もう一つ、さっきソウル大学の先生もおっしゃったのですが、今の韓国の若者とかあるいは学識のある方などは、たくさん日本においてになって勉強をされて、いろいろ研究に励まれていると思います。どうして韓国に帰られた途端にそういった方が敵対心むきだしになるような雰囲気社会になってしまうのか、ちょっと分からないところです。

(岩下) 今回の質問を2点に整理させていただきます。全先生には、つまり日本のことをよく知っている韓国の人、留学生とかがたくさん来ていると。日本のことも分かっていると。しかし、彼らが韓国に戻るとどうしてあの独島、独島、独島とみんな言わざるを得ないのかと。その韓国の政治状況や文化状況について、どうしてそうになってしまうのかということの説明してもらいたいということだと受け止めました。暫定水域の中身に関しましては、我々より町長の方がお詳しいので我々にも教えていただければと思います。

(全) 僕の弟子も後輩たちもたくさん日本の大学に留学、しかも長い時期、留学して日本についてきちんと勉強して戻る人がたくさんいます。ただ彼らは韓国に戻った後、普通、日本で学んだことについてほとんどしゃべれません。これは一つの現象ですが、理由は何なのかと。僕のお父さん、すでにあの



世に行かれましたが、お父さんのことを考えると問題が何かわかります。僕のお父さんは大正7年生まれで、日本で子どものときから勉強した人です。

しかし、それ以外、僕はお父さんについて全然分らない。1945年、韓国に戻った後は、当時を日帝時代、日帝という言葉を使って表現します。大日本帝国の縮約です。この日帝時代について、自分個人のことを全くしゃべらない。僕らと違います。僕は日本語を学んだのは49歳で、日本の学問についてきちんと勉強すべきだと考え、自分で少しずつ聞き取りのかたちで学びました。だから日本語は本当に下手です。

私たちの世代は、1960年代に大学生でした。当時、日本語を勉強すると「親日派」と言われました。みなさんは、この言葉は頭では理解できるかもしれませんが、語感は分からないでしょう。本当に怖い言葉です。日本について良いことをしゃべるのは全然だめなのです。これはタブーです。その雰囲気は今まで続いている。理由は簡単です。19世紀後半からの植民地時代の経験があり、植民地時代に悪い経験を受けた人たちの記憶、経験、それが残っている。それが次の世代の教育の材料になり、また次の世代につながる。これが起こっている現象です。だから、日本から多くを学んだ若者たちも、韓国に戻った後、日本人の良いマナーとか素晴らしいことはたくさんあるにもかかわらず、これを伝えるのが難しい状況にあると思います。これが答えです。

(岩下) 少しフォローしますと、私も、韓国の若い人たち、特に日本のことをよく知っていて勉強している方々は、今の韓国のあり方がよくないと思っていますと考えます。今年の5月、東北アジア歴史財団の研究会に呼ばれたに驚くべき光景をみました。私は、一応、北方領土問題の専門家ということになっており、韓国の研究者が北方領土問題、つまり千島あるいはクリルの経験から、竹島問題の解決のためのレッスンを引き出そうという報告にコメントを頼まれたのです。

千島をめぐる日露の交渉から、竹島問題の解決法を模索するという、すごく面白い試みでした。ただ私はやはり竹島と千島は比較にならないのではないかとコメントしました。比較してもいいけど、違いを前提に議論しなければ、と。千島には人がたくさん住んでいたのに対して、竹島は小さい岩ですから、海がまさに大事なのだとか、もろもろコメントしました。これは学問的な分析で、極めて客観的な話です。大いにこれはやればいいのですが、会議の終わりに、年配の方が執拗に手を上げられていて司会者もついに発言を許しました。すると彼はすっと立ち上がり、僕を非難するのかと思いきや、報告をした韓国の研究者にむかっていきなり罵詈雑言を浴びせました。「お前はけしからん。独島のような我々民族のシンボルである聖なる島を、千島みたいなちっぽけな島と比較するなんて、お前は本当に韓国人か」みたいなことを言うんですね。

韓国の先生は一生懸命それをなだめるので必死でした。我々から見ると、客観的に見ても千島と竹島を比較するのは難しい、島の大きさや役割を取っても違うからという議論になるのですが、韓国の年配の方は、比較そのものが許せない、ましてや「千島のようなちっぽけな」という。あまりにも度が外れているとしかいいようがない。このようなむちゃくちゃな内容を大声を張り上げて一方的に若い自国民を攻撃するような文化は見ていてただただため息です。会議の終了後、先生、大変ですねと私は肩をたたくしかなかった。こうして自由な雰囲気が奪われるのでしょうか。今もそういう状況が続いている。

しかし逆に言えば、この先生のように、本当にいろいろ物事をしっかり考えている人たちは確かにいるので、サポートをできるかぎりしたいと思います。



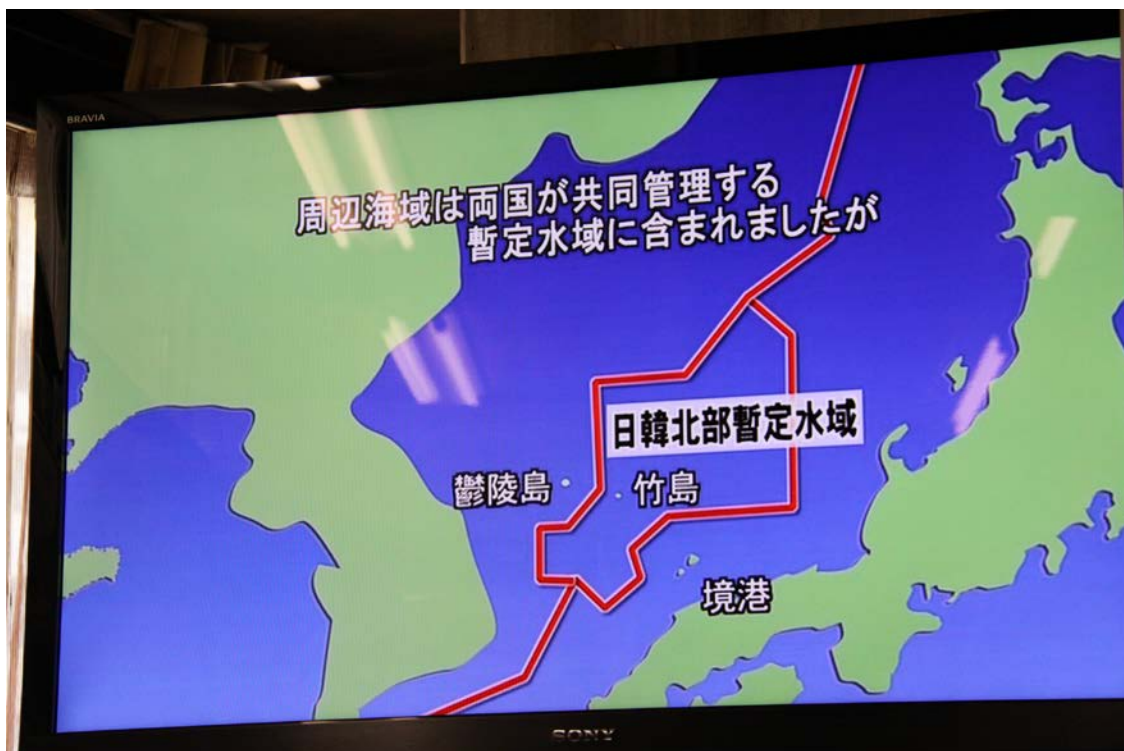
町長、では暫定水域の話に関してお願いします。

(松田) 今日には資料を持ってきていないので、私が伝え聞いております範囲でご説明します。隠岐島だけではなく日本海側の漁船が暫定水域に行っても、網か何かは張り巡らされて、海底資源も自由に採ることができない状況で、完全な締め出し状態と聞いています。この暫定水域の漁業協定ですが、監視・管理体制については、確か平成17年のときには旗国主義、つまり自分の国の漁船については自分の国で管理するという考え方にたっていたはずです。韓国船については韓国政府が管理をするということだと思えます。

年間総許容漁獲量(TAC : Total Allowable Catch)は漁船を所有する国で管理する。従って日本の漁船が漁獲した水揚げは、日本政府が管理する。韓国漁船については韓国政府が管理をするということでした。問題はこれが実現していないということだと考えております。

少なくとも日韓ともに自国の漁船の操業、TAC等についてはきちんと確認できる体制が必要だと思います。監視・管理体制も、自国だけではなく相手国についても、相互にみていくかたちにしないかぎり、今のような状態はいつまでも続くのではないかと考えます。状況を少しずつ改善して、先ほどから申し上げているような互いが有効な海として利用できるかたちにするのが最善の解決方法だと思います。

数年前にテレビを見ていましたところ、韓国では日本のそのような要求に反対する方々が、日本の国旗を踏みにじり、破り、火を付けたりにしていました。これは日本では考えられないことです。この種の問題は、互いに紳士的に話し合いをすればいいわけで、こういう行為はやめていただきたい。韓国の方に実際にそう申し上げたら、それはごく一部の過激な人のすることだと聞きました。私は日本にもそういう方々はあるはずですが、ここまでひどい行為はそう聞いたことがありません。いずれにせよ、こういうことはぜひ互いに改善していく必要があるでしょう。





(岩下) 一度そういうシーンがあると、あらゆるメディアが朝から晩まで流しますね。チャンネルを変えてもその同じシーンばかり出ます。すると韓国中が、中国中がこれを行っているように、我々も刷り込まれます。その辺はメディア関係者の方も今日、来られておりますので、ご理解いただけるのではないかと思います。

(会場から) 奄美諸島から来た島嶼学会のメンバーです。先ほど韓国には若い世代に反日感情が再生産されるという話がありましたが、奄美諸島に住んでいる僕にとってこれは非常に理解できます。奄美諸島の若い世代と言えば薩摩、鹿児島との関係が常に意識されます。去年『江戸期の奄美諸島』(南方新社)という本を出版し、その中でも触れましたが、日韓関係に比べれば、表面的な差別や差別感情はさすがに今はないのですが、若い世代の心の中には確かに反薩摩的なマインドがあります。歴史を忘れない。

2009年が薩摩による琉球侵攻400年ということで、さきほどの本を出しましたが、表面的には仲良く付き合っているにもかかわらず、若い世代に反鹿児島的な心情が出るという一つの要因が、奄美諸島に対する植民地支配です。奄美は被害者で鹿児島側は当然侵略した側ですが、加害者、つまり侵略した側が過去の歴史に対して無関心なのです。非常に無関心であり、これに対するいらだちが奄美諸島の若い世代にも伝わっている。彼らが無関心になることにより、時々ぽろっと奄美を傷つける。これは露骨な差別ではないのだけど、傷つける言葉が無邪気に吐かれたりします。そういう過程の中で400年前の歴史的な事実に対する感情が再生産をされるという構図があります。

もっと分かりやすい例を言うと、島言葉は琉球方言の一つで、その中で鹿児島弁、薩摩弁がぽっと出てくると、緊張感が走ります。鹿児島弁、薩摩弁はそのまま鹿児島から来た警察、鹿児島県の教育、県庁職員を連想させますから。日本の方も韓国に対する歴史をきちんと認識して対応しないと、ただ無関心であることが相手を傷つけるということを理解すべきです。

(会場から) 五箇のものです。ソウル大の先生に一言申し上げます。韓国の大統領は竹島へ行く時間はあるが、国際司法裁判所へ行く時間はないということですね。

(会場から) 私は関西大学から来ました。こういう時期に韓国から日本の「固有の領土」たる竹島に一番近くに来ていただいた全先生に、まず敬意を表します。先生のお話を聞いていると、非常に余裕が感じられます。私たちの側から言うと不法に占拠している国の方が、竹島にはこういう水場があると私たちに教えてくださるというのは不思議な感じを受けます。同時に憤りを覚える部分もあります。

あと、町長さんに伺います。漁業関係のことですけど、そういう協定を守ってくれと韓国側に話し合いを持ち掛ける。もしくは先ほど前の席の方がおっしゃったように、国際司法裁判所に提訴する。しかし提訴したとしても、万が一、韓国側がそれを受けて裁定が竹島が日本のものであるという結論がでた場合でも、実際には実効的支配をしている韓国が「わかりました、じゃあ、日本に竹島はお返しします」ということになるのでしょうか。たぶん、ならない。強制執行はできませんから、そうはならない。

つまり、究極、実効支配している国が強いのです。ですから話し合い、話し合いと言われても、これは未来永劫、絶対に解決しません。私は本意ではありませんけど、今から言うことは。普通の国とは何かということです。1982年にフォークランド紛争がありました。南の絶海の孤島です。アルゼンチンがフォークランドを占有したとき、イギリスが、当時のサッチャーさんが、自国領土の不法占拠に対し



て、すぐに当然のように取り戻しに行きました。そのときは確か1,000人近いイギリス兵士が死にましたが、それが普通の国ではないでしょうか。

必ずしも武力でということを行うつもりではありません。ただ実効的支配をされているということは絶対的で、それに対してなんぼ話し合いと言っても、未来永劫、無理だと言いたいわけです。全先生の余裕もそこから生まれているように思います。

(岩下) 一言だけ。竹島を韓国が実効支配しているから、全先生は余裕があるのではなく、先生はいつでもどういうときでも余裕のある方ですので、その点だけご理解ください(笑)。

(会場から) 全先生は本当によくご存じだと思いますが、今の日本は自由と平和を求め、世界の中でも稀な国民ではないかということです。韓国に戻られたら、そのように皆さんにもお伝えいただければと思います。もう一つ、離島振興のことで町長が言われましたので、来年4月1日から新しい離島振興法が施行されますけれど、それに向けての詰めがあると思います。僕は岡田克也副総理がおいでになったときにも言いましたけれど、普通の内海の離島と外海、つまり国境を抱えている離島、国境に接している離島は違った形の、きちんと分けて政策をしていただきたいと。そのためには我々島民自身の声を届けたいと思っています。ありがとうございました。

(岩下) 時間もおしていますので、最後に一言ずつお願いします。まず安溪先生には、奄美の方からの問いかけに対してお願いします。

(安溪) 差別というのは、例えば、那覇に行くと「沖縄の経済は宮古島の人に牛耳られているんだよ。宮古の人は怖いよ」、みたいに言う。宮古島に行くと、「宮古本島」と書いてあって、「あんた何島に行くの。あそこは怖いよ」というようなことを言われる。かつて野口武徳さんという人類学者は池間島に行って、「あなたたちはどこを差別するの?」と聞いたら、「いや、順番に差別されて、俺たちも差別してみたいけれどもう後ろに島がないさ、ははは」と笑った。そういう一番しっぽの差別されまくりの島で勉強ができたことを、とてもうれしく思った、と野口さんは書いています(『池間島民俗誌』未来社)。西表島の人もそのように言っています。西表の人はさらに台湾差別をしたわけですが、そういう重層的な差別の構造は今もあると思うんですね。

しっぽの島から見ると、那覇の知識人が東京を向いて、東京の人がワシントンDCを向いてぺこぺこ頭を下げているのがよく見えたりするわけですが、そういう細かい差別構造をすっかり吹き飛ばすような大事件がいま足下で起こっているではありませんか。全先生と話をしたら、「あんた、山口県に原発はいらないって頑張っているけど、朝鮮半島、韓国の東南部は原発だらけだよ。あれがボン！ となったらもう一緒よね」というので、私たち同じ未来を共有している仲間として、抱き合っ泣きました。そういうとんでもないことが今世界中に起こっています。

チェルノブイリの経験は何だったかという、ソ連、その国境なんか意味がないぐらいのグローバルな汚染が起こったということであり、またその負債をベラルーシとウクライナに押し付けるべくソ連邦を解体した、そういう面もあると思うんですね。

そういうふうに信じていた国境ががたがたになり、世界がぐちゃぐちゃになるというそういうことを、



今私たちは起こしてしまっているもので、その中で生み出される差別をいかにして乗り越えていくかということが、日常的に問われているんだなと感じています。

(司会) 全先生、いろいろな質問が来ていますが、韓国の大統領は国際司法裁判所に行く時間はないのか。それから、先生は竹島を実効支配しているから、余裕をかましていいのか(笑)。よろしくお願いします。

(全) 国際司法裁判所とか軍隊の実効支配とか、それに対して僕は答える立場ではないと思います。だから今ずっと皆さんも感じているのは、これ、この海の中、国際政治が本当に厳しい。歴史問題も含めて考えたら本当に厳しい。だからさっき安溪さんがいい話をしたのだけど、質問に答えるというよりは提案をします。ウルルン島はウルルン郡に属します。韓国の郡は日本の郡よりは大きい単位で、ウルルン郡は人口が1万人なんです。向こうのトップは郡守というので、その郡守と僕は話をしたことがあります。

あなたたちは独島問題でウルルン島には全然予算がこないと不満を持っている。島に住む人たちは本当に自分の生活を守るのが大変ですから、それより直接、隠岐の島町と何か交流をしたらいいんじゃないですかと、それを提案したことがあるんです。政治的なhot spotをつつついて、政治問題が突発したら、両方のこの海の生活が豊かになるのか、それは今は無理だと思う。だからそれをちょっと横に下げて、この海の生活を将来どう守るか、その考え方。それが今、実際必要なことじゃないかと思うんです。それで私からの提案の言葉ですけれども、隠岐の島とウルルン島が一卵性の双子関係になってはいかがでしょうか。よくある姉妹関係より強いものをめざしましょう。それを通して何かここに住む人々に対しての将来の政策ができるんじゃないかと思うんです。

理由は、この隠岐の島も東京から見たらマージナルです。ウルルン島も韓国のなかで非常にマージナルです。この二つのマージナルはいつまでマージナルなステータスのままで暮らしをつづけていいのか。まずいと思います。ですから、この二つのローカル、ウルルン島と隠岐の島を、ナショナルは今とても難しい状況だから、むしろインターナショナルな関係を築いてはどうですか。さらにインターナショナルを越えて、あらたなインターローカルレベルにおいてウルルン島と隠岐の島町が話をしたらいいのではないかと思うのです。話をしたら何か問題が起こりますか。監獄に入れられますか。そうではないと思います。町長さん、いかがでしょうか。

(岩下) では町長。最後に町長にも厳しい質問が来ましたが、よろしくお願いします。

(松田) 私が今、政府に強く求めているのは、一昨年に発表された韓国政府の海洋開発基地計画を中止させろということです。竹島から日本海側約1キロメートルの海上に42~43メートルの浅瀬を見つけて、そこにつくろうとしています。一昨年の秋10月28日に、そういった暴挙は絶対にさせてはだめだという反対ののろしを隠岐の島であげました、自民党の山谷えり子先生、島根県選出の亀井亜紀子先生、小室寿明先生らも来られましたが、その後はあまり声があがっていません。このまま放置しておく、1952年のあの李承晩ラインが決定されたようにあと半世紀もすると、今度は隠岐の島町の最北端、白島の先から60~70キロメートルの海上に再び李ラインに替わる国境線が引かれかねない、こう国に訴えま



した。

ところが政府は何もしてくれません。去年の春になり、韓国側は入札を行い、もう民間がこれを取り骨材を集めている情報まで入り、初めて去年の春の国会で大問題になった。昨年も集会を東京で開くべきだと、そして国際法廷に訴えるべきだと言いましたが、できなかつた。ようやく今年の4月11日に憲政記念館で大会が開かれましたが、韓国から見れば2年も経過してからのことです。

こういう暴挙を止めさせることが最優先でしょう。ここまで実効支配されていると、それを下げさせることは難しいでしょうが、少なくともこれ以上の暴挙をさせてはいけません。そういうなかで互いが主張を続けていく、これしかないと思います。



(岩下) ありがとうございます。私、北方領土をよく見ていて、今回、根室と共通するところがあると思いました。本当は日本の国境は竹島の向こう側にあるはずですが、竹島は隠岐の島の一部ですから、隠岐の島自体を国境の島と表現するのはかまわないのかもしれませんが、それでも竹島には入れない。根室の人たちは国境が択捉島の先だとされていますから、根室そのものが国境の街と呼べないのですが、目の前にある歯舞群島の、自分たちの一部であった島の漁場に入れないというのは同じです。要するに現地が直面する不利益とは、国境線が決まっていないことから端を発しています。そして、もめごとが起こしている不利益全部が地元にかかっているということです。しかも、そのことをほとんどの国民は理解していない。ただ島を返せ、北方領土の場合は四つ返せという島の数ばかりが問題とされています。島だけを抽象的にみているのです。

地元の人たちの利益を犠牲にして、国はいろいろなことをやります。それを私は先ほど北海道新聞のインタビューを引いて、日本の両問題は日米同盟の従属変数ですねと言ったわけです。国の方針とか国



の利益にかなうときには、国は地元を支えるのですが、そうでないときはまったく地元を無視する。はっきり言えば、地元の利益をほとんど考えていない。国は中央の外交や政策だけを考えていると言えます。

これに対してどう声を上げていくべきかという、結局、本当の地元の利益どこにあるかを強く主張していくことにつきると私は思います。私は隠岐の島のスローガンに感動しました。普通は「島を返せ」と書きます。ここは「かえれ、島と海」ですね。海の意味がかなり強いのだと、私は今日の議論をきいて改めて感じました。このことをもっともっと日本中の人にアピールをしていくことが必要です。

島がどっちのものかということは難しい国際政治の問題になりますが、他方で海はコモンズ（公共財）であり、いろいろな利用の仕方は工夫できるでしょう。例えば、領有権の問題を一応棚上げにして、海を漁民に使えるような工夫もありうるし、まさにそうしようとしていたのだと思います。もう一度、そこに戻ろう、その仕組みをきちんと動かそうという議論ができたことは、国家目線ではない、地元目線のこの会議の重要な意味だったと思います。

最後になりますが、北海道新聞の9月7日付で、今回の竹島、尖閣で自治体間の交流にどのような影響があったか調べた記事が出ました。現時点では、実はあまり影響がない。韓国の自治体が三つぐらいキャンセルして中国は二つですが、これも治安上の理由であると。自治体とか民間レベルの交流にほとんど影響が出てない。これは非常にいいニュースじゃないかと思います（編集注：日本の尖閣国有化により、中国が猛反発をする以前のことであることに留意）。

この会議も、もし国同士が戦争状態になり、船や飛行機が止まったり、渡航自粛がでたら別ですが、そうでないかぎり、地域の皆さんを交えたこういう学術的なあるいは実務的な会合は意味が、このタイミングで行われたことは意義深いと思います。もちろん、このタイミングを選んだわけではなく、島嶼学会の方々と一緒に前から準備していたので、こういうタイミングであろうがそうでなかろうが、こういう形で開催できて多くの方に来ていただき、かつ実りある議論ができたことをみなさまに心よりお礼申し上げます。島嶼学会の先生方、長嶋先生、鈴木会長それから地元の方々にもまずお礼申し上げます。今日はいろいろ個人の立場で突っ込んだ話をしてくださった町長、それから安溪先生、そして悠然といかなる状況でもここにこ笑ってお答えできる大きな全先生、皆さん、どうぞ拍手をお願いします。どうもありがとうございました（拍手）。

今日の内容はそのまま紙にして皆さんにも読めるようにしますし、DVDを作って町の方にも寄贈したいと思います。どうぞまた今日のこの議論を踏まえて次を考えていただければと思います。それでは長嶋先生、あとはよろしくをお願いします。

（長嶋） どうもありがとうございました。大変実りある、今日は特に地元の人たちが歴史の勉強ができたことは大変意義深いと思っております。どうもありがとうございました。特に松田町長から、友好の海をどう築くかという視点をもう1回しっかりと構築していく必要性についての強調がございましたし、また安溪先生からもインターローカルな歩み寄りを非常に教示されました。また全先生からは、お互いマージナル同士が結び付く、あるいは理解し合うことの大切さということをご指摘いただきまして、どうもありがとうございました。

今回の大会のテーマは島の自治力を高める、発展させる、そういうことがテーマでございますが、島の自治力を高めながらそれが外交力を高めることにも結び付いていくと思いますので、このような議論



を相互にお互いしていけることが大変意義深いと思います。いま一度パネリストの皆さんに拍手をお願いします（拍手）。





ライブ・イン・ボーダースタディーズ No.11
特集「国境フォーラム in 隠岐—シンポジウム—」

編集者： 岩下明裕 安溪遊地 藤森信吉

発行日： 2012年11月1日

発行者： 岩下明裕

発行所： 北海道大学スラブ研究センター内GCOE事務局

〒060-0809 札幌市北区北9条西7丁目

電話 011-706-4809 FAX 011-706-4952

URL <http://borderstudies.jp/>